

# コマンドーズbyロゼ

ロゼ116

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ロゼ姉さん、ちゃん、さん（指揮官）／性別：女／身長：162cm／体重：秘密／幕僚系指揮官（後方で指揮をしつつ、たまにUAVで味方を支援している）

グリフィンターゲット基地の（治安維持）戦闘部隊。

要請を受けない限り出撃しない部隊。そのくせ、指揮官はUAVで高みの見物をして  
いる。

夜に指揮官の部屋から悲鳴のような声が聞こえるらしい。

基本編成の他に、各人員をそれぞれの事案毎に編成を変えることで臨機応変な対応を見せる。

指揮官も元はスナイパーであったが、実戦経験は少ない。むしろ夜戦（意味深）の方が経験豊富だろうという噂が。

なお、他部隊では珍しく内勤組が存在する。

部隊特性：要請を受けて出撃するタイプ

／内勤組／

副官：AK—12

／前線組／

火力支援小隊：RPK—16、AK—15、AUG、95式、AEK—999

突撃制圧小隊：UMP45、UMP9、OTS—14、K11、Gr G36

狙撃偵察小隊：スプリングフィールド、Kar98k、Zas M21、Gr G3

6c、64式自

ノア指揮官視点：<https://syosetu.org/novel/2447>

58／

タンクマン指揮官視点：<https://syosetu.org/novel/2>

44180／

# 目次

5話	4話	3話	2話	1話
最終話				
30	18	10	6	1

# 1話

私はUAVで戦場を文字通り高みの見物をしている。

戦場では、タンクマンが戦術人形とともに敵を倒している。

ロゼ「いやあ、流石タンクマンだなあ。私じゃあんな前線には出れないなあ。」

12「まあ、彼は戦車ですしねえ」

ロゼ「夜戦と違ってどうしてるんだらうね」

12「さあ？ま、私たちは私たちで楽しませよう？」

ロゼ「だね！」

これは今夜抱かれちゃうわ。私はそう確信した。まあ、12に抱かれるなら本望だよ

ね

ロゼ「さて、今日はなにしよう。正直特に要請もないから暇なんだよねえ」

12「ですねえ」

そう言いつつAK—12は紅茶を用意していた。

ロゼ「今日は紅茶なんだね」

12「ええ、どうせ今日も暇でしょうし、ゆっくりしようかと。指揮官も飲みますか

「？」

ロゼ 「んー、私はエナドリがあるからいいや」

1 2 「エナドリ好きですねえ」

ロゼ 「エナドリとコーラは私のソウルドリンクだから！」

1 2 「体壊して任務に支障出ないようにしないと怒られますよ？」

ロゼ 「大丈夫大丈夫、私その辺は頑丈だから！」

1 2 「なら、今度一週間コーラとエナドリのみで過ごしてみます？」

ロゼ 「流石に飯は食わせてください……」

1 2 「なら、ほどほどにしなさい」

ロゼ 「……はい」

そうして私はエナド리를飲んでまたUAVのモニターを見始めた。

すると、扉がノックされ、Gr G36が入ってきた。

3 6 「おやつをお持ちしました。」

ロゼ 「ありがとう、3 6も一緒に食べる？」

3 6 「では、ご一緒にさせていただきます。」

1 2 「それじゃあ、私も一緒に食べようかしら」

ロゼ 「もちろん一緒に食べよう」

そして、三人でテーブルを囲んで談笑しながら、36の作ったスコーンやシフォンケーキなどを食べている。

え？私？私はもちろんエナドリだよ？

36 「ご主人様、なぜスコーンにエナジードリンクなのですか。流石にだめですよ。」

ロゼ 「えー、いいじゃん。結構美味しいよ？」

36 「美味しくてもダメです。なので、こちらのダーズリンで我慢してください。」

ロゼ 「えー、紅茶も確かに美味しいけどやっぱり、エナドリがいい…。」

36 「では、明日からエナジードリンクとコーラを抜きにしますよ？」

ロゼ 「わーい、ロゼちゃん紅茶大好き〜」

12 「あはは、指揮官手のひらくるつくるじゃん」

ロゼ 「だって、一週間もソウルドリンクを抜きにされたら死んじゃうもん…。」

36 「エナジードリンクやコーラを毎日飲んでる方が死にます！」

ロゼ 「いやいや、私むしろそれない方が死ぬよ？」

36 「どちらにせよ、飲むなどは言いませんが程々をお願いします。」

ロゼ 「ちえ〜」

おやつも食べ終わり、UAVのモニターをまた見るとどうやら戦闘が終わったらしく、既に撤収準備をしていた。

なので、私もUAVを帰還させることにした。

数分後、UAVのエンジン音が聞こえてきた。どうやら無事私のおもちやは帰ってきてくれたようだ。

それを眺めつつ私は執務室を出て、自室に向かった。

その途中でAK―15と出会ってしまった…。そう、出会ってしまったのである。

15 「おや、指揮官。どこに行くつもりですか？」

ロゼ 「ゲツ…い、いや、ちょっと自室に…」

15 「どうせゲームやるだけでしよう。それなら一緒に訓練場に行きますよ！」

ロゼ 「え？ 私戦闘出ないから良くない？」

15 「万が一のためです。ほら行きますよ！」

そう言うとう15は私の服を引っ張り訓練場に強制連行するのであった。

ロゼ 「いやだ〜！ 私はゲームしたあぁあいいい……」

そうして連れて来られた訓練場には、私たちの他にUMP姉妹がいた。

9 「あれ〜？ 指揮官じゃ〜ん、どしたの〜？」

ロゼ 「いやあ、そのゴリr」

15 「ん？」

ロゼ 「…15に連れて来られた」

9 「それじゃあ、一緒に訓練しよう！」

ロゼ 「え？もしかしてここに味方いない？」

45 「むしろ味方しかいないでしょ。指揮官を鍛えてあげるんだから！」

ロゼ 「oh…このまま夕飯までゲームするとういう私のプランがああ！」

15 「ほら、好きな銃を選ばせてあげますから早くしてください」

ロゼ 「(・ω・)」

私はスナイパーライフルとしてオーソドックスなM24を選んだ。これでも元スナイパーなのである。実戦経験あまりないけど……

15 「それでは、始めますよ」

ロゼ 「…はーい」

そして始まった地獄の訓練をどうにか終えて食事の時間となったため、食堂へ行くことにした。

え？訓練内容？やめてくれ、思い出したくない。

食堂へ移動中にRPKから、タンクマンからの連絡が入っていることを知った。果たして今回はどんな内容なのかしら。楽しみである。

## 2話

今日もやることはない。相変わらずタンクマンは戦場に出てるらしい。

そういえばノア指揮官のところで整備してもらったおもちゃ見に行かなきゃ。

ロゼ「……………What's this??」

整備されてたおもちゃに、なんか付いてる。

ロゼ「よりによつてなんでコレ付けちゃうかなあ……」

そこに付けられていたのはサーモバリック爆弾だった。

ロゼ「いや、普段攻撃しないの知つててわざとだな??」(あとで仕返するかあ、)

そう言つて、私は12に連絡を入れた。

ロゼ『ノア指揮官にサーモバリック付けられたからその仕返しするけど来る?』

12『行く。あ、でもちよつと用事があるから午後でいいかしら?』

ロゼ『いいよ。それじゃあ、自室で待つてるね』

よし、それじゃ、今日はゴリラ15のせいで出来なかつたゲームを存分にするんだ!

ロゼ「~~~~♪」

コーラとさきいかを手に私は自室に向かっている。そして、ついに自室に辿り着い

た。

ロゼ「やった〜！今日は誰にも邪魔されずにゲームができるぞ！」

そして、私はPCを起動した。

ロゼ「さて、今日はなんのゲームやろうかなあ。水上艦かなあ、潜水艦かなあ、それとも歩兵にしようかなあ」

え？指揮官らしいことしてないって？気にしたら負けさ！！

ロゼ「いやあ、やっぱり戦艦同士の殴り合いは至近距離の同航戦に限るねえ」

自室に冷蔵庫あると便利だね！だって部屋から出る必要ないんだもん！

ロゼ「さて、流石に2時間も水上戦やってたら飽きてくるなあ、ミサイル撃ちてえ……潜水艦乗るか！」

そうして、私は潜水艦のゲームを始めた。多分やってれば12がいい感じのタイミン  
グで来るだろう。

ロゼ「ヒヤッハ〜！シエラー撃破あ！次はどいつだあ？」

やはり、海戦は素晴らしい。陸にいるより海にいたい。まあ、この人形はみんなかわい  
いし、12はカッコいいしで最高だけどね！

すると、ドアを開ける音が聞こえた。

12「入るわよ〜」

ロゼ「おっ！来たね！ちよつと待ってて今いいところだから」

12「なら、適当にくつろいでいるわね」

ロゼ「ん〜」

そして、さつさとミッションをクリアさせた。

ロゼ「終わったよ〜」

12「は〜い、それで？ノア指揮官にはどんな仕返しをするの？」

ロゼ「それが未だに思い付かないんだよねえ…」

12「う〜ん…」

ロゼ「C4をノア指揮官に引っ付けるか！」

12「いいわね、それじゃあ早速準備しなきゃね！」

こうして、我々はノア指揮官に仕返しをすべく準備を始めた。もちろん、実行担当は

AK—12だ。

ロゼ「さて、あとは12が夜間に実行してくれるからなあ」

RPK「あ、指揮官様。丁度いいところに」

ロゼ「ん？」

RPK「タンクマン指揮官がお茶会に来ないかとのことです。」

ロゼ「あー、今日はパス！まだゲームする！」

RPK「わかりました。では、そう伝えておきますね」

ロゼ「よろしく〜」

そう言つて、私はまた自室に向かった。

自室でゲームをしてそのまま寝落ちたのは言うまでもない。え？夕飯？ちよつと何を言つてるか分からないね！

## 3話

今日も相変わらずタンクマンは働き者だ。

てか、昨日仕掛けたC4あっさり信管抜かれた……

ロゼ「まあ、爆発させる気なかったからいつか」

そう呟きながら、私は遅めの朝食を食べていた。

ロゼ「さて、自室に戻ってゲームしよ」

私はそのまま自室に向かった。

ロゼ「さて、今日はどのゲームをしようかなあ……せや、麻雀しよ」

ほんとなら誰かとやりたいけど、ここに全自動麻雀卓ないんだよねえ、今度ノア指揮官に発注しよ

そんなこんなで麻雀を始めた。

その頃、基地内の通信室が騒がしくなっていた。

36「前線のタンクマンより連絡です！現在、ラマデイ戦線のテロリストを制圧中のM16が負傷、激しい攻撃を受けて撤退中とのこと、支援要請が来ています。」

K11「おっ？てことは緊急事態か？私の出番だな！」

12 「緊急事態なのは確かだけど、出番があるかはロゼちゃん次第ね」

RPK 「とりあえず指揮官様に連絡だけどうせゲームしてますよね」

12 「そうね、私が行ってくるわね」

RPK 「お願いしますね」

一方、ロゼ指揮官の麻雀

ロゼ 「あー、クツソ！なんでそんな安手で上がってるんだよ！もつと良い手があった  
ダルオ！」

現在、南3局で3位という成績のようだ。因みに四麻である。

ロゼ 「次オーラスじゃんマジかよ」

私はこのまま高い手で上がらなければ負け確なのである

と、その時、ドアが開く音が聞こえた。

12 「ロゼちゃんいる？」

ロゼ 「ん？いるよ？どしたの？」

私は麻雀をしながら返事をする

12 「タンクマンから連絡があつて、M16が負傷、撤退してるそうよ」

ロゼ 「あら、珍しいこともあつたもんだ」

12 「それでタンクマンから出撃要請が来てるのよ」

ロゼ「なるほど、この試合終わったr…（ロン！ごめんなさいねえ〜）

12「……」

ロゼ「……Fuuuuuuuuuuuu c k!!!」

最下位のやつに、捲れもしないクソ安手で上がられて終わったんだけど!!!

12「丁度終わったみたいね^^」

ロゼ「……どこに行けば良い…?」

12「みんな通信室にいるわよ」

ロゼ「なら全員を会議室に集めて」

12「はい」

私はちゃんとした服に着替えて会議室に向かった。

ロゼ「入るよ〜」

会議室に入ると全員が集まっていた。

ロゼ「よし、全員揃ってるね」

36「今回の要請はタンクマンからで、市街地戦での戦闘中にM16が負傷、敵の総攻撃をくらい撤退。」

36「撤退の際にタンクマンの素体も損傷が激しく帰還後の速攻ができないための要請です」

ロゼ「……………」

36 「現在も敵はタンクマンが強襲を仕掛けた建物にいるそうです」

ロゼ「…なるほど」

ロゼ（タンクマンの部隊がやられるほどの敵なのか、はたまた運がなかったただけなのか…）

ロゼ「よし、本日16:30にまた会議室に来てくれ。それまでに作戦を決めておく。なお、今この瞬間から出撃準備体制を敷く。各自出撃に備えておけ」

全人形「Yes! ma'am!!」

皆が会議室を出て、各々の出撃準備を始めた。

ロゼ（さて、どうするか…、敵拠点の建物の構造はタンクマンから情報を貰えたから、それを元に作戦を考えるか）

12 「今回はどうする予定なの？」

ロゼ「そうだなあ、一部編成を変えようかなと考えてはいる」

12 「そうね、その方がいいかもしれないわね」

ロゼ「それじゃあ、私はこのまま会議室で作戦を考えるから、12は各人の準備状況の確認と通常業務の方を任せて良いかい？」

12 「もちろんいいわよ。それじゃあ頑張つてね」

ロゼ「……………」コクッ

AK—12の言葉に頷きつつ、私はまた考え込む。

ロゼ（これはあえて無難な作戦の方がいいかもしれないな）

一方、準備状況の確認に行った12は、UMP姉妹と会話していた。

12「まさか、M16が負傷するなんてね」

9「ねー、珍しいよね」

45「何があつたんだろうね」

9「仇は私たちで取ってくるからね！」

UMP9は元氣よくそう言うと、12に対してピースをした。

12「ええ、ロゼちゃんも喜ぶわ」

そう言つて、AK—12は執務室に向かつて歩き出した。

考え事していると時間が経つのが早い。時計は既に16:30を指しており、それ

ぞれの準備が終わつた人形たちが次々と会議室に入つてきた。

ロゼ「……………」

そんな中でロゼ指揮官は、未だに考え事をしているようだ。

36「ご主人様、全人形揃いました。」

ロゼ「ん、ありがとう」

そうして、ロゼ指揮官が敵拠点の地図が広げられている机の前に立ち、雰囲気が一変する。

ロゼ「今回は敵拠点とその周辺にいる敵の一掃だ。もちろん一匹残らず殺つてくれて構わない」

ロゼ「敵拠点が建物ということもあり、若干編成の変更を行う。ただ、狙撃小隊は変わらずだ。」

ロゼ「AUG、君を制圧小隊に編入させる。そして、制圧小隊と支援小隊でそれぞれ2分隊に分ける」

ロゼ「OTS—14を分隊長とした第1分隊はUMP9とK11、そこに支援小隊からRPK—16とAK—15を付ける。」

ロゼ「残りを第2分隊として、分隊長をAUGとする。編成の説明は以上だ。この後、作戦の概要を説明するが、何か質問はあるか？」

ロゼ指揮官の問いには誰も反応せず、皆静かにしている。

ロゼ「よろしい。では、概要を説明する。今回は建物を東側を1分隊、西側を2分隊で挟撃する。」

ロゼ「その際に、支援小隊はそれぞれ突入の支援を行い、その後は周辺の敵の掃除を行つてくれ。」

ロゼ「制圧小隊は、建物に入り各階を制圧し、屋内から周辺の掃除をしてくれ。」

ロゼ「最後に狙撃小隊は建物の北側にある、中高層建物で狙撃での支援をするように。なお、射撃は各々の判断に任せる。というか敵と思ったら躊躇なく殺せ。」

ロゼ「仮に民間人でも知ったことではない。戦場ではよくあることだ。最悪ノア指揮官に後始末させるから気にするな」

ロゼ「乗り物は狙撃小隊はリトルバードを使い潜入、他はハンヴィーで数台で侵入するように。他に必要なものがあれば12か直接ノア指揮官に言ってくれ」

ロゼ「あと、敵は想定外の攻撃を仕掛けてくるかもしてない。その時は作戦を放棄してその場の判断で行動してくれ。もちろんあの辺一帯を無人にしてくれても構わん」

ロゼ「作戦の概要は以上だ。質問はあるか？」

K11「ガスマスク持っていい？この間実験したやつ試したいから」

ロゼ「いいだろう。であれば全員が装着するように、ただ狙撃小隊は外しても構わない」

ロゼ「他にはあるか？」

全人形「……………」

ロゼ「無いようだな。では、明日の出撃に備えて今日はゆっくり寝るように。」

ロゼ「では、解散！」

ロゼ指揮官の一言で、各々が自分たちの部屋に向かい、明日の出撃に向けそれぞれの想いを募らせるのであった。

ロゼ「ふう…」

12 「お疲れ様」

ロゼ「ええ」

12 「ロゼちゃんも今日はゆっくり休みましょうね」

ロゼ「もちろんだよ、12、一緒に寝てくれるだろう？」

12 「もちろん、夜戦は作戦が終わるまでのお楽しみにしておくわね♡」

ロゼ「その時は一段と激しくなりそうね」

12 「ロゼちゃんも楽しみにしておいてね」

ロゼ「……」

そうして、二人とも、ロゼ指揮官の自室に戻り、同じベッドで健全な眠りにつくのであった。

## 4話

翌日、私は普段より早く起きたのだった。

ロゼ「……今何時だ？」

時間を確認しようとスマホを確認する。そこには4:30の文字

ロゼ「うわ、めっちゃ中途半端な時間やん、マジかあ」

そう思った時、ふと違和感に気づく。

ロゼ「あれ？12はどこに行ったんだ？」

そう、隣で寝ているはずの12がいないのである。

ロゼ「まあ、いつか」

特に気にせず、寝室からリビングのような部屋に行くことにした。

すると、そこにはソファに座っている12がいた。

ロゼ「12おはよう」

12「あら、ロゼちゃん今日は早起きのね」

ロゼ「あまり寝付けなくてね」

12「なら、時間までゆっくりしましよ、何か作るわよ」

ロゼ「そしたら、コーヒーをおねがい」

12「はーい」

そう返事をする、12はキッチンに行き、サツとコーヒーの豆を挽いていた。あとはお湯を注ぐだけで出来上がりだ。

ロゼ「やっぱり、12はカウンター越しの姿似合うね」

12「そうかしら」

ロゼ「うん、すごくかっこいい」

12「ロゼちゃんは可愛いよね」

ロゼ「……ちよつと何言ってるかわからない」

12「照れちやつてかわいいねえ」

ロゼ「……」

12「ほら、コーヒー出来上がったから拗ねないで」

ロゼ「…全く」

そう言つてコーヒーを受け取り、下を火傷しないようにゆっくりと流し込んでいく

ロゼ「ふう…ふう…」

12「……」ニコニコ

ロゼ「そんなニコニコしてどうしたの？」

12 「ん？猫舌のロゼちゃんがかわいいなあって」

ロゼ 「熱いから仕方ないじゃん」

ロゼ 「そんな12はなにか飲まないの？」

12 「そうね、紅茶持つてくるわね」

12 は再びキツチンに行き、紅茶を準備していた。

ロゼ 「12はお酒とかも作れるの？」

12 「もちろん」

ロゼ 「なら、今度作ってよ」

12 「いいわよ、とっておきを作ってあげるわね」

ロゼ 「やった！」

12 (ふふつ、やっぱりロゼちゃんは可愛いわね)

そう思ったAK—12は出来上がった紅茶を飲み始めた。

二人はそのまま飲み物を飲みながら時間が来るまで談笑していた。

12 「そろそろね」

ロゼ 「もうそんな時間か……」

12 「先に行ってるわね」

ロゼ 「うん」

12は自室の扉を開け、今いる建物の屋上へと向かった。

ロゼ「……眠い」

そう一言だけ呟くと、クローゼットを開け、正装に着替えた。

ロゼ「…よし」

ロゼ指揮官も、12を追うように屋上へと足速に向かった。

屋上に着くと既に、12が地上を見下ろしていた。

12「皆楽しそうね」

ロゼ「まあ、久々の出撃だからね」

12「そりゃあ、ロゼちゃんが出撃サボってるからねえ」

ロゼ「……なんのことかな？」

12「あら、そんなこと言ってもいいのかしら？」

ロゼ「だって、仕方ないじゃんゲームしたいんだもん」

12「まあ、それがロゼちゃんだからいいけどたまには出撃させてね？」

ロゼ「…気が向いたら」

そんな会話をしていると地上からハンヴィーのエンジン音とリトルバードの起動音がし始めた。

ロゼ「うん、いい音鳴らすねえ」

下から何人か手を振っているのが見えたので、手を振り返した。

ロゼ「さて、うちらも色々準備するか」

1 2 「それじゃあ、ゲームしないように執務室に行きましょね？」

ロゼ「…あ、バレた？」

1 2 「ロゼちゃんどれでも指揮官なんだから戦闘くらい見てないさいよ」

ロゼ「まあ、UAV飛ばす予定だけど」

1 2 「なら、それで偵察できるわね」

ロゼ「うへえ、やるかあ」

くだらない話をしながら、二人は執務室に向かって歩いていった。

執務室に着くなり、ロゼ指揮官はUAVの起動ボタンを押して、プレデターを滑走路へと前進させた。

ロゼ「とりあえずプレデターで出たけどアレいつ使おう」

1 2 「サーモバリック？」

ロゼ「そう」

1 2 「着く前に使うか支援するときを使うかじゃないですか？」

ロゼ「そうなんだけど、着く前はともかく支援は人形に被害出そうなんだよねえ」

ロゼ「もう適当に落とすか」

12 「その方が人形に被害出そうですけどね」

ロゼ 「撤退したあとならなにも気にせず落とせるからそっちにしよ」

彼女たちが出撃してから、数十分そろそろ狙撃小隊が到着する頃だろう。

ロゼ 「お？このリトルバードってうちの？」

12 「そうね、つてことはハンヴィーももう少しね」

ロゼ 「なら、あとはゆっくり見ておくか」

私はUAVの自動旋回機能を起動して椅子の背もたれに寄りかかって腕を組んでハンヴィーの到着を待っている。

その頃、ハンヴィーは目的地の3キロ手前を走行していた。

36 「久々の実戦ですね」

95 「そうですねえ」

36 「AEKはノリノリですね」

999 「ん？そりゃあ、久々の実戦、それに合わせた新曲。心踊らないわけがない！」

45 「楽しそうね」

AUG 「もうそろそろ着くから準備しなさい」

車内無線から賑やかな声が聞こえてくる

14 「あつちは楽しそうね」

9 「こつちも楽しく行こうよ！」

15 「それで効率が落ちたらどうするのですか？」

14 「そんなに効率を気にするものではないですよ」

K11 「うへへえ、新薬の実験ができるう」

RPK 「一体、どんな薬を作ったんですか？」

K11 「それはついてからのお楽しみです」

そんな会話をしていると、ヒュンツ！という風を切る音がした瞬間、正面の建物群から複数のマズルフラツシュが見えた。

15 「contact!!」

15 の一声でハンヴィーは2台づつに別れて進行し始めた。

そして、それぞれに付いている火力支援小隊が敵に向かって銃撃を始めた。

雨のように降り注ぐ銃弾を掻い潜り、無事に建物に到着した。

36 「go! go!」

その声とともに第2分隊の人形たちがドアを蹴破り、建物に突入していった。

それとほぼ同時に東側で小さな爆発が起こり、15の「GO!!」の音が聞こえてくる。

そして、それぞれが建物1階を制圧、階段の前で合流した。

この建物は3階建てのようで、第1分隊が3階、第2分隊が2階を担当することにしたようだ。

相変わらず、外では火力小隊が敵と撃ち合っている音が聞こえてくる。その音をBGMに階段を登る合図をお互いが交わす。

AUG「……」コク

14「……」コク

お互いがハンドサインで会話をして、静かに階段を登っていく。

2階に到着すると敵が待ち構えており、すぐに銃撃戦が始まった。1分隊はそんな中で3階へと続く階段を目指す。

しかし、3階へ続く階段の先にはショットガンを構えた敵が構えていた。が、撃とうとした瞬間敵が倒れた。

すると、14の耳につけている無線から声が聞こえてきた。

Zas「こちら狙撃小隊、排除完了」

そう、別で待機している狙撃小隊が直前で敵を撃ち抜いたのである。

そうして3階に突入した1分隊も無事制圧し、建物内の無力化に成功した。

建物内を無事占拠した1、2分隊はこのままハンヴィーに乗り、撤退する予定だった。しかし、外では支援小隊の4人がずっと射撃を続けている。

そう、建物の無力化は成功したとはいえ、建物の外では今いる人数以上の敵が押し寄せてきている。

狙撃小隊の方も狙撃の援護しつつ自身の安全の確保をするために、一緒にいる護衛のARたちが周囲を牽制している。

建物の1階に降りて、支援小隊と合流をする。

36 「そつちの状況は？」

RPK 「最悪ですよ！」

周囲に敵が大量に押し寄せている状態だ。

支援小隊に加勢する形で制圧小隊が加わった。

15 「どうしますか？このままここにおいても罅があきませんよ」

36 「しかし、この後どこに行くと言うのですか！」

9 「そういえば、指揮官って撤退の時の行動どうするか言ってたっけ?！」

45 「言つてなかったと思う」

15 「とのことだが？」

36 「ご主人様は大事なおところでおつちよこちよいなんですよね」

15 「それはそうだな」

そうして、彼女たちはここから撤退するためにも、狙撃小隊と合流しなければならな

いと考え、移動することに決めた。もちろん、狙撃小隊にも連絡した。

一方、ロゼ指揮官はUAVの画面を見て、くつろいでいた

1 2 「…ロゼちゃんはくつろいでていいの？」

ロゼ 「大丈夫でしょ、みんな強いし。」

1 2 「でも、撤退どうするか言っていないわよね」

ロゼ 「……」

1 2 「言っていないわよね？」

ロゼ 「ツス…ヤツベエ」

1 2 「やっぱり」

ロゼ 「気付いてたの？」

1 2 「もちろん」

ロゼ 「なんで言ってくれなかったの？」

1 2 「だってその方が面白いじゃない？」

ロゼ 「いや、うんまあ、そうなんだけど、なんかあつたらめんどくさいじゃん」

1 2 「あの子達なら大丈夫よ」

ロゼ 「ならいいけど…」

そう言いつつもロゼちゃんはやっぱりくつろぐのであった。

狙撃小隊と合流した主力小隊はこれからどうするかの話し合いを始めた。

45 「この後どうする？」

スプ 「とりあえず、連絡するのがいいんだろうけど、こっちはハンヴィー4台一応走り抜けられれば帰還できるけど。」

14 「しかし、ある程度の攻撃は考慮しなければならぬでしょうね」

15 「だが、ここに留まっても罅が明かない」

36 「では、今回は4台で行動して、反撃しつつ撤退することが良さそうですね。」

話し合いも終わり、これから撤退する準備を始めようとしたとき、空から何かの落下音が聞こえてきた。

そして、大きな爆発音とともに着弾地点周辺が火の海に包まれていた。

その正体はUAVから落とされたサーモバリック爆弾だった。

999 「ふう!! いいぞ指揮官! いい音だ!」

15 「ある程度は敵を蹴散らすことができたが、未だ敵がいることは確かだ。警戒するに越したことはないな」

撤退の準備が整い、基地に向けて出発した。

街を走り始めると至る所から銃撃されているが、この調子なら無事に帰還できそう  
だ。

UAVを見ているロゼ指揮官も撤退している様子を見ていた。

ロゼ「いやあ、直前でサーモバリックのこと思い出してよかったわ、やっぱ陸戦は嫌  
ダア！」

12 「でも、こうやって上から見れるからいいじゃない」

ロゼ「まあね、とりあえずUAVを帰還させて彼女たちが帰ってくるのを待つてよう  
か」

12 「そうしましょう」

そう話してから数十分経った頃、地平線から4台のハンヴィーが見えてきた。

その後はみんなを労ってパーティーをして騒ぎまくって、今回の作戦が無事完了した  
ことを報告書にまとめて寝たのである。

## 5話―最終話

作戦が終わり、またいつも通りの平穩が訪れた。え？他の部隊が出撃してらつて？よそはよそ、うちはうちつてやつです。

そんな感じでいつも通りになったということは、つまりロゼ指揮官の墮落具合が元に戻ったというわけなのだが。

今日は、作戦後ということもあつて、自室で12とゴロゴロしている訳にもいかず報告書に追われている。

ロゼ「…なんで報告書かなきやいかんのだ」

12「そりゃあ、サーモバリック落としたらそうなるわよ」

ロゼ「いいじゃん、味方を救助するために仕方なくて」

12「まあ、それで済んだら味方を救助する名目で核だつて落とせちゃうわよ」

ロゼ「くっ…」

12「それに早く終わらせればいいだけのことじゃない」

ロゼ「それはそうだけど…」

12「なら早く終わらせなさい」

ロゼ「え？12は手伝ってくれないの？」

12「だって私は何もしてないもの」

ロゼ「た、たしかに…」

12「そういうことよ」

そう言うのと彼女はソファで紅茶を飲みながらくつろぎ始めた。

12「まあ、今回は久々の作戦だったし、多少は許されると思うし大丈夫でしょう？」

ロゼ「だ、いいけどね。けど、上の連中の頭の硬さと言ったらピカイチだからね。正

直どうなるかわかったもんじゃないけどね。」

ロゼ「だけど、今回のはなんとかなるでしょ。」

12「結構、樂觀的なのね」

ロゼ「そんなもんでしょ」

12「それもそうね」

そんな会話をしつつ、ロゼ指揮官はそのまま執務机に向かってウンウン唸っては報告書を書いてを繰り返していた。

ロゼ（作戦が終わったら一緒にイチャイチャするって話だったのに、なんでこうなるんだ。まあ、いいや、どうせすぐにここともおさらばだ。）

そんな中でもAK—12は相変わらずソファで寛いではこつちを見てニコニコして

いる。

ロゼ（あー！くっそ！2めニコニコしやがって、こっちは12成分が足らなくて今にも干からびそうだっていうのに！）

12「私もロゼちゃん成分切れそうだから、眺めてるけど直接補給したいから早く終わらせてね♡」

ロゼ（……………さっさと終わらせて出発までイチャっこ）

ロゼ指揮官は善は急げと言わんばかりな早さで報告書を書き始めた。欲望に忠実なのはいいことだ。

そうして、書類関係を終わらせたロゼ指揮官はAK—12と存分にイチャイチャした後、飛行機に乗り込んで旅立ったのであった。

ちなみに、飛行機内でもイチャついていて一緒についてきた他の戦術人形に呆れられていたの言うまでもない。